

『太か男』 前編

今日 あした

「兄弟仲良うしてこん海がごつ太か男になれよ」

渚に広がる鬼の洗濯岩。太陽の光を反射してきらきら光る海。

子供の頃、三人の息子を海に向かって横一列に並べて、父が風に負けないように大声で言った言葉だ。

父の野辺送りの日だった。

父はこの海を見下ろす斜面一面にミカン畑を作っていたが、それでは生計が立たず、街道沿いで豆腐屋を営んでいた。

毎朝四時に起きて豆腐の仕込みを始める、生真面目でコツコツと生きた父の言葉を繁は無意識につぶやいたのだ。

父は決して豪快な人ではなかった。あの時、広大な海を見て自分には叶わない夢を、兄の大、儂、繁と弟の光に託したのだろうか。

九頭の家は、父と母、その間に三人の男、二人の女の子がある。長男の大は中学を卒業すると、父親を助けて宮崎市内にある魚市場に勤めた。

目端の利く大は、一時もじっとしていない。一度教わったことは次からは言われなくても進んでやってしまう。その年は、中学を卒業して市場に勤めたのは大一人だった。その風体は、相撲取りのようにながしりした大きな体におにぎりの形をした三角の小さくて愛嬌のある顔がちよこんと乗っている。名前が珍しいこともあって、買い付けに来た仲買人から気さくに声をかけられ、頼まれれば労を惜しまず荷物運びだろうが、伝言だろうが、何でも引き受ける。そんな大は、誰からも重宝がられ、可愛がられた。

努力家の彼は三年目には独立して魚の仲買人となり魚市場では知らない人がいないくらいの目利きになった。そして、父の野辺送りの時には、二十歳で魚市場の中に自分の店を持つまでになった。

折しも昭和二年の金融恐慌の頃で、店が持てたのは運が良かったのだろう。幼い頃、海を見ながら父が言った“こん海がごつ太か男”に、兄貴はなつたんじやるなあ、高校生の繁は思った。

大は朝の早い魚市場で働き出してから、市内のアパートで一人暮らしをして

いる。父親の死で、久しぶりに帰って来た兄は、野辺送りを済ませると、葬儀に来てくれた近隣の人や商売仲間に、

「精進落としじゃから、ぱっとやりましょ」と、挨拶もそこそこに酒を勧めて
いる。

「母さんはここに座って」と、母を床の間の脇に置いた骨壺の横に座らせる。
母は大女ではあるが、大のように愛想が良いわけではなく黙って座って、悔や
みを言われると頭を下げ、酒を勧められると、黙って飲んでいく。大は父親に
似てまったくの下戸である。大きな体でみんなに注いで回りながら、勧められ
ると「酒の方は、おふくろや、繁と光に注いでやって下さい」と剽軽に言っ
て、皆を笑わせている。

「繁と光はまだ高校生と中学生じゃろうが」

「わしは二十歳過ぎでも飲まんのですから、高校生が飲んだちゆうてんかまわ
んとですよ」

「おかしな理屈じゃのう」

「うんにゃあ、菊も、花も、よう飲めませんけん、九頭家は、酒豪と下戸が、
三対三でちょうどどうまい具合にできちよります」

「菊も花もまだ小学生だろうに」

「あつ、そうじゃった！」

大はいつまで続くのかと思うほど、にぎやかに冗談を言い、葬儀の客を送り
出すと、骨になった父親の前で新たに線香を付けて両手を合わせた。

「父さん、賑やかじゃったのう。なんも心配はいらんよ。わしが稼いで、母さ
んを助くるから……。弟や妹たちにひもじい思いはさせんから、教育はちゃん
と受けさせるから、見ちよって下さい」

声に出して言い、深々と頭を下げた。

農業高校に通っていた繁は、真面目で勉強ばかりしているような子だった。

成績も良かったので先生から大学に行ってはどうかと言われ、自分も行きたく
あった。だが、父が亡くなったばかりで、弟や妹を抱えている母には言い出せな
い。すると、兄が

「繁は大学に行きたいとやろう、官員試験に受かったら、夜間大学にでも行っ
たらよからうが。官員じゃったら夜間の大学に行くことも奨励しとると聞い

よるが……」

「大学に行ったら母さんに仕送りもできん……兄さんは、魚屋を開いたばかりで借金もあるとやろう」

「そんなこと繁が気にすること無か。お袋や、弟、妹のこつは俺おいが何とでもしちやる。大船に乗ったつもりで、官員試験をうけたらよか」

繁には三歳年上の兄が、本当に海のように大きく見えた。

繁は国家公務員となり、農林省に勤めながら夜間の大学に通うことも叶った。故郷を離れ、今までとは百八十度違う、たった一人の東京での官舎住まいが始まった。規則正しく役所に行き、よほどのことがない限り定時に帰り、夜間大学に行く。

人付き合いの下手な繁にとって、黙々とやる仕事も勉強も楽しかった。充実した日々だった。

東京に来て二年程経った頃、兄の大から大きな木箱いっぱいいの荷物が届いた。宮崎の魚市場で手に入れた干物や昆布などの海産物が入っている。

兄のおにぎり頭が目に浮かんだ。母や弟、妹にも金がかかるだろうに、こんな所にまで気をまわさなくても、有り難いより申し訳ない思いが先に立つ。賄いのおばさんに、

「これ、田舎から届いたので使って下さい」

と渡すと、喜んでくれたのはいいが、それから会う度に気さくに話しかけられて往生したものだだった。

木箱が届いて一か月もしないうちに、今度は電報が届いた。

「アスゴゴージ トウキョウエキニツク ムカエタノム」

店はどうしたのだろうか？何かあったのだろうか？店を休んで本当に来るのだろうか。

翌日は土曜日だった。役所の帰りに東京駅に行き、九州から来る汽車をホームで待った。

三等の辺りにいると、相撲取りのように大きな兄が、二等車から降りてくるのが見えた。大きな木箱とトランクを持って、すらっとした女と話をしている。知り合いじゃろうか、繁はゆっくりと近づいた。

「おー、繁、よう来てくれた。今日は土曜日じゃから、役所はもう終わったと

じやろう。早うこっちに来い」

兄の後ろにいる女は、繁を見るとちよつと会釈をして、もの問いた気に兄を見た。

「こいが弟の繁じゃ、こいが松子、新婚旅行で東京に来よつたつよ」

「誰の？」

「おいと松子に決まつとろうが」

何の前触れもなく、突然聞いた繁は、あんぐりと口を開けたまま言葉を失つた。

発車のベルや拡声器の音、人々の話す声が、混ざり合つて耳を通過していく。

「日本食堂で甘いもんでも食べようかね。ほら、繁、荷物を持たんね」

木箱を押し付けられてやつと我に返つた。兄は東京に来るのは二度目だと言つていたが先を歩いて勝手知つたるように食堂に入つて行く。席に落ち着くと、「おーい、姉ちゃん」と、大声で女給を呼んだ。

「繁は日本酒にすつか」と口にする、返事も聞かずに

「日本酒二合と、ソーダー水を二つ、サンドウィッチ三つ、たのんます」

兄はそれだけ注文をしまつと、向かい合つて座っている繁を見て

「こいは、村井松子ちゆうて、青島に住んどるとよ。新婚旅行に来る前に県庁に寄つて籍ば入れて来よつた」

嬉しそうに下膨れの三角顔いっばいに笑みがこぼれた。

「……………」

女給が注文したものを置いて行つた。

兄は日本酒の二合徳利を持つと、

「ほい、繁、まあ飲めよ」と、酌をしてくれた。

白と深緑の縦縞の着物を着た松子が一瞬、黒田清輝の『湖畔』のおんなどダブつて見えた。繁はこの画家が好きなのだ。

彼女はしゃきつとした涼し気な佇まいで、繁の目を見た。

「村井松子です」

そのまつすぐな視線に挑戦でも受けているような感覚にとらわれた。

「はあ……」とその目に応えて、兄に目を移し

「そいで祝言はいつするとね」と聞くと、

「祝言みたいなもの、せんで良かつて、松子が言いよるけん、新婚旅行にきた

とよ。もう籍も入れてきちよったかい、こいが祝言よ」

再び松子に目を向けると、ふっと、大きな目は柔らかな表情になり、引き締まった口元をぼそつと動かして、

「私は再婚ですけん、祝言なんて晴がましゅうて……」

やっぱり似ている。黒田清輝の絵の、湖畔の岩にうちわを持って腰掛けているくつきりとした目鼻立ちの女の顔に。

「そげんこつ……、こげん綺麗な人が兄貴の嫁さんじゃったら、母さんも喜んでるじゃろうに、母さんのためにも婚礼ばしたらよかろうに」

「……」松子は困ったように、ソーダー水のストローに手をやった。

「お袋は、派手なことが好かんじゃろが」。兄が代わって応えた。

「松子には男の子が二人おるとよ。旦那さんは漁師じゃったとやが、下ん子がまだ腹におる時に事故で亡くなんなさったんじやて」

「それは……、苦労しなさったとですね」

「はい。そいでん、主人は私の実家の青島で家族と一緒に住んでいましたので……、今日は置いて来たとですけど、子供達にあまり寂しい思いをさせずにいます」

「悠太と磯吉いうて、三歳と二歳の年子じゃけど、わしに懐いとるけん、なんも心配無かとよ」

「そうねえ」

繁は一瞬、子供が二人もいるこの人は幾つだろうかと思った。兄貴の方が松子さんを、たまらんごつ好いとるのだろうな……とも思った。

「松子さん方がわしより二歳年上じゃけん、姉さん女房よ」

大は、繁の気持ちを探して、剽軽に三角頭をすくめた。

「松子さん父親は、船を一隻持って海産物の商いをしとるとよ。一度海に出ると三か月くらい帰って来なさらんので、帰った時はそりゃ賑やかに大盤振る舞いをされるそうじゃ。じゃけん、後は細々と暮らしていなさるんじやって」

大は、コップを手に持ってソーダー水の残りをストローで音を立てて飲み干した。それから、

「松子は長女で下に女三人おつとじゃけん、みんな別嬪さんよ」と、嬉しそうに言った。

日本食堂を出ると、繁は大夫婦を連れて、四谷にある官舎に帰った。

「繁、こいを管理人さんに持って行ったらよか」

大は、繁に持たせていた大きな木箱を顎で指した。

そう言われて入り口の管理人室のドアをたたいて木箱を差し出し、管理人の田村さんに

「兄が持ってきてくれたので食べてください」と言うと、声を聞いたおばさんが奥から出てきて

「九頭さん、ありがとうね。お兄さんがお見えになったの？」と言うと、管理人室の受付の窓から身を乗り出すようにして、

「九頭さんのお兄様ですか、九州から出ていらしたのですかあー、初めまして。

先日は、九頭さんに、宮崎のお兄さんから送ってきたとおっしゃって、海の幸をたくさん頂きました。ありがとうございます。美味しかったですよー」

から始まって、立て板に水の話しっぷりで、この独身寮のことや繁の普段の生活を喋った。挙句に兄のことに話を移して、根掘り葉掘り質問をし、新婚旅行に來ていることまで兄に喋らせ、あげくに、地方の役人が上京してきたときの宿泊施設まで薦めてくれた。

「喜んでもらえて嬉しかです。じゃっどん、新婚旅行ですけん、こいから熱海に行って一泊して宮崎に帰ります。弟んこつ、よろしゅうお願い申します」

兄は大きな体を二つに折って、恐縮する管理人夫婦に挨拶をし、繁の部屋にしばらくいてから帰って行った。

六年の歳月が流れた。

その間に、弟の光が普通高校を卒業して帝国大学を受験し、みごとに合格して東京に出て来た。

繁は、夜間大学を卒業し、高等文官試験に合格したのを機に、正月に宮崎に帰った。日豊本線で宮崎に着くと、そこから故郷の野島まではバスの旅である。左側に海が見え隠れする道をガタゴト行くと登り坂となり堀切峠に至る。そこから角度を少し変えて下りになるのだが、峠を過ぎた途端に雄大な海が視界いっぱいになり飛び込んでくる。そして足下には、波に浸食されたでこぼこの、鬼の洗濯岩と呼ばれる岩の波打ち際が延々と続く。

ああ、帰って来たのだ。

六年ぶりに帰った故郷は、通りに面した豆腐屋や、瓦屋根、あけっぴろげな

縁側など兄弟で走り回った外観はちつとも変っていなかったが、家に入ると、もう自分の家という感じがしない。

菊と花は二人とも女学生になって、見違えるほど大きくなっていたが、繁を見てくすくす笑っている。

「どげんしたとね」繁が言うと、

「繁兄さん、オジサンみたい」

箸が転げてもおかしい年ごろなのだろう。顔を見合わせてクスクス。

「何言うちよるとか」繁が言うが一層笑いが止まらない。久しぶりに会った兄を見て照れくさいのだろう。

松子の子供だという八歳の悠太と七歳の磯吉が走り出てきて、菊と花にまわりついた。

母だけが、全く変わらせずに前掛けで手を拭きながら奥から出てきて、

「繁、お帰り。ほら、悠太も磯吉も、おじちゃんが帰って来たとかから、こんにちは、じゃろうが」と言いながら、出迎えてくれた。

正月の支度は、大の妻になった松子が何日も前から泊まり込んでいたそうので、田舎家がピカピカに磨き上げられ、このうちでは見たこともないほど立派な松飾が飾ってあった。

大はその頃には魚市場とは別に、宮崎の市内でも魚屋を始めていて、相変わらずの商売熱心で料理屋から個人の客まで得意客を持ち、大晦日は深夜まで正月用に盛り付けた魚を配達していたそうので、夜遅くなってから正月用の魚を担いで帰って来た。

「おい、松子、こいを台所においちよいてくれ。」

繁、帰って来たか、お帰り。明日はお前の見合いじゃけん、早う寝ちよけ。

わしも疲れたけん、風呂に浸かったらもう寝るわ」

「……俺の見合いって、何のことね」

「おい、松子、話しちよいてくれ」そう言うときさつさと風呂に行ってしまった。

「義姉さん、見合いって、何のことですか」

「繁さん久しぶりにお帰りになったとに、急なことでごめんなさいね。兄さんが私の末の妹と繁さんで見合ひさせるのだと言ひ出して……。」

結婚式もしなかったでしょう兄さんと私、それでお正月に繁さんが帰って見えた時に私の家族に会ってもらうことになったんですよ」

「それで見合いですか？」

「前にお話ししましたが、私には妹が三人いまして、末の桃子だけ、まだ結婚していません。それで兄さんがそう言ってくれたとですよ。ご迷惑なら断って下さいね」

「迷惑もなんも……。兄貴は手紙でも知らせてくれたらよかつに」

「兄さんは、繁さんが来なさる少し前に思い付かれなさったとですよ」

「そいでん……」

「私たちが籍を入れたのも、新婚旅行に行ったのも、思いついてすぐに行動に移されるのですけん、びっくりするんです」

「そげんこつですかー」

正月は毎年、早起きをして、お屠蘇と雑煮を並べ、家族揃って「おめでとーございませう」とかしこまって正月の挨拶をすることになっている。そしてお屠蘇に口をつけ雑煮だけを簡単に食べたら、みんなで鬼の洗濯岩の中にある九頭家の墓に参る。

繁は、父が亡くなった次の年から東京に行ってしまったので、久しぶりの正月だった。

弟の光は帰って来なかったが、決まり通りの正月をした。だが、どうも勝手が違う。これまでは生真面目な父と、何も喋らん母と、男兄弟三人、それに小さな菊と花の七人だったが、今日は、母と、大一家四人、自分と女学生の妹二人。物見遊山でも行くように、櫛とバケツを持った松子を囲んで、妹たちや悠太、磯吉が弾むように賑やかに前になったり後ろになったりしながら、墓参りを済ませた。

「義姉さんは『貫禄』じゃね。すっかり九頭の大黒柱じゃが」繁が言うと、

「そうじゃろうが、お袋も松子がおる時は楽隠居をきめちよるごつある」

と、大は満更でもなさそうに言って、

「昼は青島から松子の両親と末の妹の桃子が来ることになっちよるんじゃ。」

村井ん家は松子が長女で三人妹がおるとじゃけん、二女と三女はもう嫁に行つたよ。そいで、繁と桃子を見合いさせるちゆうことになつるとよ」

「そんなこつ何も聞いとらんがあ」

「松子がなんでん上手くやってくるから、お前はただ座つちよつたらよかよ」

「そいでん、桃子さんは幾つなん？」

「二十一才で、別嬪さんよ、女学校を出てから宮崎の百貨店に勤めるとよ」
家の前まできて振り返ると、満汐になったようで、鬼の洗濯岩から一段高くなつたところにある墓地の五メートルくらい先まで波が寄せてきている。

見合い相手の桃子さんは、本当に別嬪さんだった。松子が黒田清輝の油絵なら、桃子は鏑木清方の日本画だった。清楚な日本人形のようなだ。

繁は自分のような何の変哲もない武骨な丸メガネの男の所に、こんな綺麗な人が来てくれるのだろうかと思つたが、桃子の方は、見合いをする前から嫁に来ることを決めていたようだった。

繁が地方転勤で四月から宮崎の県庁に来ることになるらしい、と言うと、

「そんなら話は早いわ、四月にうちの料亭の『菊水』で祝言を上げたらよか」

「うちの料亭って？」

「今度、旅館も兼ねた料亭を出したとよ」

驚いて松子に顔を向けると、急にしゃんと背筋を伸ばしてこわばつた声で、

「二号さんにやらせとりなさるとですよ」と、他人事のように言った。

「板前に良いのがおるけん、繁盛しちよるんじゃ」

兄は松子の声が聞こえなかつたかのように大きな声で言った。

大には商才があるのだろう、だが情にも脆く、お金にもならないような貸家も沢山持っているそうだ。

繁は予測通り、四月一日から宮崎県庁での勤務が決まり、引越しの準備をして宮崎に来たのは、土日を挟んで初出勤の三日前だった。引越しと言つても、官舎住まいだったので、家具などほとんど無く、本や身の回りのものを詰めたチツキとトランク一つの身軽なものだった。

駅には県の職員が出迎えて、県庁からほど近い官舎に案内してくれた。

平屋の一軒家で、植え込みなどもあり、勿体ないような住まいを一通り見ながら、兄の家に向かった。大の魚屋は目抜き通りにあつて、官舎からは市電を使えば五分とかからなかつた。

「義姉さん、今着きました」

店先にいた松子に声を掛けた。

「繁さん、お疲れでしたでしょう。兄さんは魚市場の方の店にまだ居なさるのですよ。桃子が奥で待つとりますけん、早う、上がつて下さい」

桃子に会うのは、正月の見合いの時とで二回目である。

松子から手紙で《桃子は繁さんの嫁さんになると言っているが、結婚の話を進めても良いか》と言ってきたので《かまわない》と返事はしたが……

「さあ、さあ」と松子に促されて奥に入った。

「お待ちしていました」

コチコチになっっている繁に、桃子は、まるでデパートの客を迎えるように明るい顔を向けた。

「はあ」

それからは早かった。結婚式の日取りは六月十日の大安吉日と、もう決まっていた。

「兄さんが『家具は嫁入り道具だから桃子が決めたらよか』って言いなさるので、私が勤めているデパートで色々見ておいたのですよ。少し休みなさったら、すぐ近くですので一緒に見てください。いつでも届けてくれるそうです」

日本人形のようにおとなしそうな顔をした桃子は、物言いはゆっくりだが、何もかも一人で決めているようだった。

「はあ」

呆気にと取られている繁に、松子がお茶を入れながら、

「嫁入り道具って言いまして、兄さんが全部詭えてくれなさるとですよ。上等のを頼みなさったらよかです」

「姉さんもあ言ってくれるんだから、早く行きましょう」

甘えを含んだ桃子のしぐさを、繁は心底可愛いと思い、自分がこんな人を娶ることができるのを奇跡のように思った。

宮崎に来てから二年の月日が経った。その間に玉のように可愛い男の子が生まれ、繁は姓名判断の本と首っ引きで隆夫と名付けた。

丸メガネで堅物、その上無口の繁が、胸ポケットに妻と赤子の写真を忍ばせて、酒に酔うと「息子が生まれたとですよ」と見せるのが役所では評判になった。みんな面白がって、普段付き合いない人にまで酒に誘われる。酒豪の繁は嫌とは言わないで毎晩深夜にご帰還。そんなある日、

「今帰った。ももこー、起きちよるかー」

「お帰りなさい」

「お義母さん、どうなしさったとですか」

「大兄さんに呼び出されまして、桃子と隆夫がしばらくあちらにいるので、繁さんの面倒を見るように言われたとです。桃子が勝手をしてすいません」

覚えていたのはそこまでだった。

明け方、美味しそうな味噌汁の臭いで目を覚まし、ぼーっとした頭で桃子の行動を考えた。結婚以来、桃子の思い通りにならないことなど何一つない。見かけはおっとりしているが、根っからの我儘で何でも手に入れてしまう。しがない役人の安月給で手に入らないものは、兄貴をつかまえて「兄さん、あれが欲しいの」だ。隆夫も生まれて母親になったちゅうに……。

「繁さん、朝ご飯が出来とります」

「お義母さんを煩わせてしもうて、申し訳なかつた」

「いえとんでもない、桃子が我儘でご不自由はお掛けしてすいません」

この母親が美しいから娘たちが別嬪なのだ。繁は娘のために小さくなって給仕をしている義母を横目に、何の脈絡もなくそう思った。

その日、役所の帰りに兄の魚屋に寄ると、桃子の姉たち全員が揃っていた。

上から松子、桜、楓、桃子、みんな木の名前だが、松子と桃子が際立って美しい。他の二人はそれなりだと、いつもながら繁は黙って品評する。

「義姉さんがた、桃子と隆夫がお世話になってすいません」繁が言うと、

「桃子の我儘も困ったもんです。繁さんには申し訳ないことです」

「子供が生まれたのじゃけん、まともなお母さんになってもよかですのに……」

「私ら子供を持ったち、だれも家出なんかようしませんわ」

口々に囁し立てている所に大が帰って来た。とたんに、それまでふくれっ面をしていた桃子の目からじわっと涙が出た。

「どげんしたとか、桃子をみんなでいじめちよるのか」、大が言うのを聞いて、桃子はもう滂沱の涙。しゃくりあげながら、

「兄さん、私はずっと我慢ばかりしてきたとに、末っ子だからっていつつも姉さんたちがいじめるとよ」

「それが嫌なら、家出なんかしなさんな。ほら、旦那さんが迎えに来てくれなさったけん、早よ帰ったらよか」、松子が言うと、

「姉さんたちが妹をいじめてどげんするとか。繁も女房子供を泣かすようなことはせんで、さあ、腹がすいたらどうにもならん、松子、みんなの飯のした

くをせんか！」

と、大が怒鳴ると、

「はい、はい。二号さんも三号さんもおりなさる旦那さま！」と捨て台詞を残して松子は奥に行った。

繁はもうあきらめていた。桃子をどうにかしようと思うのはよそう。実の姉さん達でさえ、ああ言っていたではないか。

「もう何も言うまい！」繁は腹を決めた。

それからは桃子の独壇場だった。

正月などは、役所の人たちが年始の挨拶に来るのだが、桃子は大に頼んで『菊水』から料理を運んでもらい、仲居や芸者を呼んでいた。役人の役宅である。数えきれないほどの靴が玄関に溢れた。

大にとってみれば大変な出費だろうが、商売に結び付く投資でもあったのだろう。繁は酒好きなので満更でもなく、何もかも桃子のやりたい放題だった。

二番目が生まれると、桃子は長男の隆夫だけで手いっぱいと言って、後から生まれた康夫は、さっさと大に預けてしまった。

もともと、兄の方も、松子との間に子供が出来ず、松子の子の悠太と磯吉は、商売が忙しいので青島の実家に置いたままだった。大にしてみれば、弟の子とはいえ血のつながりのある子を手元に置きたかったのだろうし、松子もそれを察して断われなかったのだろう。

桃子は暑いと言っては、隆夫と女中を連れてえびの高原あたりに避暑に行き、寒いと言っては温泉に行く。しがない月給取りの妻だというのに……

兄は羽振りが良かったのだ。兄弟、姉妹にばかりではなく、他人の子供たちにも教育を施していた。困っている人を何人助けたかわからない。

繁が宮崎に赴任してから五年が経ち、東京に転勤の辞令が出た。

まだ日中事変のさなかで「ぜいたくは敵」のスローガンのある頃である。

宮崎勤務最後の月給日のことだ。

渡される筈のものが無い。辞令が下りたばかりだったので、何かの手違いだろうと思ひ、経理部に行ってみた。

「月給ば、まだ貰つたらんのですが」

そう言うと、奥に座っていた部長が出てきて、

「ちよつと外に……」と、廊下に出された。

「あのー、九頭課長、ご存じないのですか」

「何をでしょうか」

「お兄さんの九頭大様に、県の方で九頭課長の月給を担保にしてお金を用立てています。しかし、期限が来ても返済がないので差し押さえたそうです」

そんな話は聞いていない。

自分を差し置いてそんなことが出来るのだろうか、繁は血の凍る思いだった。

つづく